

聖書:使徒の働き15章1～21節

説教:なんの差別もなく、信仰によって

はじめに

この教会が西教会の開拓伝道所として建てられて22年になろうとしています。開拓の当初はいろいろな苦労がありました。礼拝のやりかたなど基本的なことは親教会を手本にすればよいので問題はない。ところが、自分たちで考えなければならぬ細かいことが沢山ありました。例を挙げれば、昼食はどうするか。うどんやそばにするか、それとももっと手をかけたメニューにするか。みなさん熱心に議論してなかなかおさまらない。いま教会では、牧師交代という大きな節目を迎えようとしています。話しが具体的になっていけば、いろいろな考え方が出てるでしょう。ほかの教会のことですが、牧師交代を機に教会が二つに分かれてしまったと聞いたことがあります。

使徒の働きには、最初の教会が建てられていったときにいろいろな問題が起きたことが書いてあり、ここでは大きな対立と論争にまでなっています。彼らが直面した問題はなんであったのか。そのとき教会はどのようにして乗り越えていたのか。ともに見てまいります。

## 1 論争

### 1) 使徒たちの最初の考え

イエス・キリストから始まった福音のみことばは、使徒たちを通してユダヤ人たちに伝えられていく。福音はユダヤ人のものであって異邦人は関係ない。使徒たちは最初そのように思っていた。ですからエルサレムに建てられた教会は最初、ユダヤ人しかいなかった。

そこへパウロという人が出てくる。イエスから直接選ばれた使徒たちと違い、パウロはイエスが十字架で死んでよみがえられた後から使徒となった人で、与えられた使命もほかの使徒たちとかなり違っていました。

### 2) パウロが異邦人のところへ遣わされる

話しは、彼がクリスチャンを迫害していたところに戻ります。彼は、あるとき強い光を受けて地面に倒れ、生ける神であるイエス・キリストに出会い、食事も喉を通らないほどになってしまいます。そのとき、神はアナニアというひとりの弟子をパウロの所に遣わすときにこう語るのです。9章15節。

「行きなさい。あの人是我の名を、異邦人、

王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。」

パウロはこれを聞いて、自分の使命をはっきりと自覚します。しかし、いきなり異邦人に福音を語ることは慎重でした。混乱を引き起こすとわかっていただけからです。それでどうしたか。前回、パウロの伝道旅行のようすを見てきました。新しい町に着くとユダヤ人の会堂に入り、そこに集っているユダヤ人たちに福音を語ります。当初は異邦人には語らなかつた。ところが、迫害が激しくなつて町を去らなければならなくなつたときになってはじめてこう宣言する。13章46節。「ですから、見なさい。私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。」

その結果多くの異邦人が救われていった。そういう流れになっています。

### 3) 異邦人にもモーセの律法を守らせるべきである

そのあとどうなつたか。このままで済むはずはない。予想していたことでしたが、あるユダヤ人がやって来て、異邦人がクリスチャンになるのなら割礼を受けさせるべきである。そうでなければ救われない、と言いだした。これが論争の発端になり、エルサレムに行つて使徒たち、長老たちの意見を聞くことになつた。こうして、いわゆるエルサレム会議と呼ばれるものが開かれることになりました。

ところがこの会議でも、パリサイ派の者で信者になつた人たちが、「異邦人にも割礼を受けさせ、モーセの律法を守らせるべきである」と主張する。クリスチャンなつたとは言え、やはりパリサイ派として律法を守ることを大切に考える習慣はそう簡単には変わらない。

## 2 証しとみことば

### 1) ペテロとパウロ

そんなこんなで話しが行き詰まりそうになつたとき、ペテロとパウロそしてヤコブの三人が立ち上がる。まずペテロです。彼は7～8節でこのように述べます。「兄弟たち。ご存じのとおり、神は以前にあなたがたの中から私をお選びになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされました。そして、人の心をご存じである神

は、私たちに与えられたのと同じように、異邦人にも聖霊を与えて、彼らのために証しをされました。」

「異邦人が私の口から福音のこぼれを聞いて信じるようにされた。」その話しは、10章の所に詳しい。ローマ軍部隊の隊長であったコルネリウスという人の家にペテロが遣わされて、そこで福音を語ると聖霊が降って、コルネリウスとその家族が神を賛美しはじめたので、すぐにバプテスマを受けたという出来事です。このことは後で教会の中で大問題になるのですが、そのときは異邦人が救われることはあくまでも例外扱いということでおさまった。

ところが次々と異邦人が救われていくのですから、これはもう例外扱いでは済みません。きちんと考えなければならない。そこでペテロは9、11節でこう語る。「私たちと彼らの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。」「私たちは、主イエスの恵みによって救われると信じていますが、あの人たちも同じなのです。」神の前では救いになんの差別はない、ユダヤ人であろうが異邦人であろうが、ただ信仰によってのみ救われる。私たちにはごく当たり前のことですが、当時のユダヤ人にとってはまるで天地がひっくり返るくらいことでした。でも、もう狭い考え方を捨てるべきだと主張した。

続いて立ったパウロも、伝道旅行の途中、異邦人の間でしるしと不思議が行われ、多くの異邦人が救われたことを報告し、ペテロの見たことと自分が見てきたことはまったく同じであると証言します。

## 2) ヤコブ

ペテロとパウロのふたりが揃って同じことを証言をした。これで結論は出たと言いたいところで、世間の話し合いならそうなるでしょう。しかし教会はそこで終わらない。もう一つ大切なことが残っている。

続いて壇上に立ったヤコブは聖書を開いて、いまペテロとパウロが語ったことが、ほんとうに聖書のみことばと一致するかどうか確認する。それでアモス書9章を開く。「わたしの名で呼ばれるすべての異邦人が、主を求めようになるためだ。」

ここで二つのことがわかる。一つ。神が異邦人も同じように救ってくださることは、すでに旧約聖書の中で約束されていること。二つ目。異邦人はどのようにして救われるのか。割礼を受けよ、とは書いていない。主を求めるだけで救われる。そ

う書いてある。ペテロとパウロの証言とみことばは完全に一致している。

## 3) 互いへの配慮

割礼についてはこれで一件落着です。異邦人は受ける必要はありません。でも、まだ細々とした問題が残っています。それが20、21節です。「ただ、偶像に供えて汚れたものと、淫らな行いと、絞め殺したものと、血とを避けるように、彼らに書き送るべきです。モーセの律法は、昔から町ごとに宣べ伝える者たちがいて、安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。」

たったいま、割礼は必要ないと言ったばかりなのに、モーセの律法は守りなさいと言っている、これはなにかです。

神学校のある先生の話しを思い出します。先生が結婚したばかりのとき、二人で皿を洗い、その後どうするかでけんかになった。夫は、洗った皿はすぐにふきんで拭くという習慣。妻は、ふきんで拭かないで濡れたままかごに入れて乾かす。たっただけのことですが、お互い譲らないで険悪になったというのです。みなさんも経験があつておわかりでしょう。そんなとき、どちらかが譲らなければいけない。ヤコブが言っているのはそれによく似ている。

ユダヤ人はクリスチャンになったとは言え、安息日にモーセの律法を読み、生活の一部のようにして守ることを心がける習慣は残っています。一方異邦人にはそのような習慣はない。この両者が一つの教会に集うのです。大切な原則は妥協せずにきちんと守る。そこは絶対に変えない。けれどもお互いにそれぞれの立場を尊重することも大切。相手が嫌だと思ふことは避けましょう。これがヤコブの言いたかったことです。

## 3 神の教会

### 1) 信仰によって事実と向き合う

教会は神を信じた者たちが集まる所でありながらも、トラブルは起きます。問題はのときどうするかです。今日の箇所から三つのことを教えられます。一つ目。ペテロとパウロは、当時のユダヤ人の常識からはずれたようなことであっても、自分たちが目撃したことを包み隠さず報告します。砂糖でまぶして食べやすくしようとか、反対されそうなことは隠しておくとかそんなことはしない。これは神のみわざであると確信するならば、変な小細工はしない。教会は主がかしらなのだから、必ず理

解しもらえるはずとの信仰で、真っ直ぐに語った。これが一つ目。

## 2) 神のみことばと照らし合わせる

そして二つ目。神のみわざと確信したから、全部正しいということにはならない。きちんと聖書のみことばに照らしながら、客観的な視点でみことばと一致しているかそうでないかを調べる。なぜなら聖書は神のことばであり、そこにすべての判断の基準が示されているからです。

## 3) 聖霊による一致に導かれる

そして三つ目。今日の所には具体的には出てきませんが、ここに聖霊の働きがあることを忘れてはならない。そもそもペテロがコルネリウスのところに行って福音を語りなさいと示したのが御霊なる方でした。その結果異邦人に降ったのが聖霊です。パウロも聖霊に押し出されて伝道旅行に出かけたなら異邦人が救われた。そこで論争が起きてしまったけれど、それを鎮めて教会を一致させるてくださるのは聖霊なのです。

一般の会議では、皆と違う意見を言う事を荒立てるとか、あの人の顔を潰すとか言って言うべきことを言わない、いわゆる忖度することがある。でも教会は違う。意見の違いがあってもよい。いろいろな意見を述べ合ううちに、神のみこころがもっとわかるようになることがあるからです。分かれていた意見が一致に導かれるとき、聖霊の働きを覚えて神の御名をあがめることさえできるのです。

この教会の課題となっている牧師の交代ですが、人が人を選ぶのですから、いろいろな意見があがってきて、場合によっては論争になるかもしれない。そのとき大切なのはなにか。人の顔を見るのではない、神を見ていくことではないでしょうか。聖書のみことばに聞いていくこと。そして聖霊の働きにゆだねていく。もしそうすることができたならば、神は必ず最もよいところにこの教会を導いてくださると信じます。